石造物にみる地域文化圏

市内では、鎌倉時代から室町時代にかけての年号を記した中世の石造物が７点あります。このうち高平地区南部に所在している６点の遺品には、際立った特徴がみられます。まず使用されている石材をみると、５点までが旧川辺郡波豆(はず)村(現在の宝塚市西谷地区)で産出されたとされる波豆石を用いています。

上槻瀬の板碑

またこれら５点のうち４点までが、石碑状の台石に仏を表す種子(しゅじ)(梵字(ぼんじ))や施主名などの銘文を彫り込んだ、板碑(いたび)と呼ばれる遺品です。中世の板碑は関東地方には広く分布していますが、西日本では限られた地域にだけ分布し、市内では高平地区でしか見ることができません。

これらの板碑には、建立された年月日が彫り込まれており、板碑を鑑定するうえで貴重な情報を与えてくれます。年号は鎌倉時代の嘉暦(かりゃく)２(1327)年から南北朝時代の文和(ぶんわ)３(1354)年までの27年間にまとまっています。南北朝時代には、南朝・北朝それぞれの朝廷が別々の年号を使用していましたが、板碑をはじめとする当時の高平地区の石造物は、いずれも北朝の年号を使用しており、北朝の勢力圏であったことを示しています。

さらに日付をみると、板碑４点のうち３点までが７月15日です。この日はお盆の最後の日として、現代では月遅れの８月15日に先祖をまつる習慣が多く残されています。旧暦の７月15日は特に中元(ちゅうげん)と呼ばれ、墓を清めて先祖を迎え、供養する日とされていました。板碑には、有志の人々を表す「一結衆(いっけつしゅう)」という言葉や、亡き人々すべてを弔う「万霊永供養(ばんれいえいくよう)」という言葉も彫られています。これらのことからみて高平地区の板碑は、地域の先祖供養を目的に有志の人々が力を合わせて建立したものと考えられます。

波豆石を用いた中世の石造物は、県下最大の板碑など宝塚市西谷地区にも多数分布しています。このように当時の西谷地区から高平地区は、文化的に共通の地域圏を形作っていたものと考えられます。

生涯学習支援課 市史編さん担当